

一仕切一仕切に間敷を書き載せたり。按ずるに権現堂の門前といへる事は、東照宮の門前地に附けられし故なり。故に昔は権現堂町とも呼べり。寛永廿年八月東叡山大僧正より書簡如左。

今度東照權現爲御迎、村井兵部少輔殿爰元首尾能く今日奉守出御候、無異儀可爲着御候間、御法事等首尾能き様御取持任入候、仍東照權現門前之儀、末代之儀候間、民少御相談候而御寄附之儀、御次而に筑前守殿に可被達候、先づ以て其の儀を不申談、疎遠之至に候、我等茂從、去月中旬相煩ひ、于今平臥之跡に候、大方得驗氣候間、可御心易候。委曲常照院可申候。恐々謹言。

八月廿日

大僧正

西尾隼人殿 人々御中

權現堂町・兩末寺町、其の外町並につゞき町を立有之處之儀、本町同然、諸法度以下諸事、町奉行より可被申付候事。

慶安二年四月十二日

津田玄蕃頭

葛巻隼人正

横山左衛門尉
長九郎左衛門尉
奥村河内守

宮城采女殿
臨田九兵衛殿

右書簡等にて見れば、寛永二十年に城内北丸に東照宮の社を建立ありて、遷宮の際北丸の近邊なるに依つて、松原町の地邊をば東照宮の門前地となし、地子を別當所へ寄附せられし故、町名を権現堂町と稱し、或は権現堂御門前町共呼びたりしを、後に御門前町と略稱せしもの也。故に此の一町は、其の以來東照宮を産土神となし彼の社の掃除方をば町内より勤め來れり。然るを金城深秘錄に、松原町を枯木橋へ追ひ出し、其の跡へ御門前町を追ひ出す。御門前町は往古道場屋敷の時分の町名なり。今は神護寺門前と云ふ。神護寺は少將光高君の時御造營也と記載し、三州志來因概覽附錄には、昔金澤城山に本源寺とて本願寺の末寺ありし頃、城門の前なるが故に御山御門前と土民敬唱し來るを、後に町名となすと云ふ。神護寺門前と云ふ儀には非

ずといへり。平次按ずるに、右兩書の説は、並に後人の附會なるべし。神護寺は東照宮の別當にて、神護寺をば別當屋敷と呼べり。御門前町と稱したる地、即ち其の實神護寺の門前地ともいふべけれど、其の初め城内へ勸請ありし東照宮の門前地に寄附ありし故に、権現堂町とも権現堂御門前とも呼びけるもの也。外寺院の門前地は皆某寺門前と呼びつれど、御門前町は城内に勸請ありし東照宮の門前地に、東照宮をば御宮と稱し來りける故に、その門前地も御門前と崇敬し、遂に町名をも御門前町と呼べるなるべし。今此の町名を廢すといへども、尙俗に御門前町と呼べり。

○内惣構堀

此の惣構堀は舊藩中金谷門邊より金谷出丸を巡り、不開門前を経て、近江町・新町の後を押繞らし、母衣町より淺野川へ流通し、東は奥村氏の第後より鑿ち初め、味噌蔵町より枯木橋へ流通し、母衣町に至り淺野川へ流達す。之を内惣構と呼べり。中にも金谷殿の外廻は、従前は溜堀になしありしかど、尾山神社を此の地に建築し、明治八年神門造營の時土居を崩し、惣堀を悉く埋め、今僅に残れり。堀下

も廢藩の後に追々埋めて、今は遺跡も知れざる如く成りたり。

○惣構堀普請來由

有澤武貞の金澤細見圖譜に云ふ。慶長四己亥年の冬、大阪表にて加賀陣の沙汰有之刻、虚説たるの仰せ分けられの使に横山大膳を遣され、利長卿御用心の爲に金府に惣構の堀を穿ち、土居を築かる。今の内惣構是なり。甚だ急なる事にて、僅か廿七ケ日に其の成功を遂げたり。尤も侍普請なりと云ひ傳へたりとあり。三州志來因概覽にも、慶長四年の冬浪華に於て増田長盛等森計の讒により、國祖高德公と徳川内府と俱に疑團を生ずるにより、瑞龍公越中より金澤へ還城、高山南坊に命じて城壁を再修せしめ、城下の羅郭をなし内壘を掘らしむ。僅に二十有七日にして盡く成る。今存する内羅郭是なりと。平次按ずるに右大阪にて加賀陣の沙汰云々といへる事は、關屋政春古兵談に、慶長四年八月大阪にて江戸内府家康公より使者を以て、我等數年國元へ參らず、仕置等無心元に付き罷下り、來春罷登り貴方と代り度し。但し先づ貴方御下國被成、來春御登り候て、